

森信三著『読書と人生』致知出版社、2011 年 4 月 30 日刊を読む

森信三先生の「読書と人生」第一章からの抜粋

1. (1) 「われわれ人間には、読書が必要だ」と「自覚的に考えること」。
(2) 「自覚的に考えている人」とは、
 - ①事柄の意味を突き詰めて考え、
 - ②はっきりした認識に達する
 - ③さらにそれが終始わが心の中に生きて
 - ④常に実践せられている人(3) 「読書の意義ないし価値という問題」を、「自覚的に考える」。
 - ①「読書という営みが、われわれ人間にとって、その生活全体の上で、いかなる位置を占めるのか」
 - ②「われわれの人生において、読書という営みが、いったいいかなる比重を占めているか」
2. (1) 「明確な認識がもてるまで、この問題を突き詰めて考え、かくして到達した認識を、始
終わが心の中に堅持、そして読書というものが、その人の成果の中において、一本強く貫い
ている」。
(2) ここまで来て、はじめて、「真の読書人」。
(3) 「読書は、その真価を発揮する」。
3. (1) 「読書について真剣に考える人」とは、
 - ①「読書の意義と価値とを、自覚的に把握し認識している人」
 - ②「二度とないこの人生を、真に自覚的に生きようとする人」
 - ③「人生を自覚的に生きようとしたら、何人も読書というものと無関係ではありえない」(2) だから、「近頃はあまり本が読めなくてね」とは、「わたくしは、近頃、人生を真剣に生
きようとすることは、廃業することにしました」と同じこと。
(3) ①「われわれ自身の生活内容、すなわち人生の内容は、豊富で複雑」
②「書物は、多彩で複雑極まりない人生内容の反映、その縮図」
③「読書は、そのような人生の生き方と深い内面的な関連がある」
4. (1) 「書物を読むということは、無限に複雑な現実社会の一端について知ること」。
(2) 「読書とは、他の人の経験を通して、現実解の諸相を知ること」。
(3) 「読書とは、幾多の優れた人々を使って、この無限に複雑な現実解の諸相を探知しよう
とする努力」

5. われわれに必要な読書とは、

- (1) 「われわれ自身が、この二度とない人生をいかに行くべきかという問題を中心とする読書」
- (2) 「自己の職業を中心とする読書」「専門的な読書」
- (3) 「以上の二つを合わせたものを円心としつつ、自分の生命力を半径として、できるだけ大きな円周を描こうとする読書」即ち、「広義における教養としての読書」

6. 読書の真意義は

- (1) 「自己が真に読書を体認することによってのみ、初めて得られる」
- (2) 「人生を真剣に生きる」「読書の意義と価値を知っている人は、すでに読書をしている人」
- (3) 「まだ読書に打ち込んでいない人には、読書の真の趣（おもむき）はわからない」「何か珍しい食べ物は、まだ食べたことのない人には、その味の分かつはずはないのと同じ」「真の読書の味わいを知らない人々に、一体どうしたら読書の味わいを知らせることができるのか」「どうしたら、そういう人々を書物を読むようにさせることができるのか」「これまであまり書物を読まなかった人々、また、多少は書物を読んではいるとしても、真剣に読書と取り組んでいなかった人々を、どうしたら読書に取り組み、読書に打ち込むようにさせることができるのか」

7. (1) 「人生と読書は切り離せない」「いやしくも真摯（しんし）にこの人生を生きようとする以上、われわれは、どうしても書物を読まなければならない」

(2) 「真の読書をするには、どうしたらこの二度とない人生を真剣に生きられるかという、人生観的な希求が、その根本に働いていなければならない」

(3) 「我々の生命が、人生と読書という、二つの中心をめぐる、生命の無限なる循環として、生命の円運動を起こすべきだから」「読書によって、そこには無限なる周流が起こる」「われわれの生命を、いわば円運動から螺旋的展開にまで導くことだ」「このようにして、われわれ人間の生活も、初めて真に本格的な軌道に乗ったといえる」「そうした地点までにたどり着くには、一体どうしたらよいか」

8. (1) 「一本の箸で、たらいの水を周流させるコツ、工夫を」「工夫と努力が必要」「当の本人はもとより、指導にあたる先輩の人々には、本人以上の根気が必要」「いやしくも、普通に当用漢字程度の文字が読めさえすれば、本は読む気にさえなれば、何人にも読めるわけだが、問題になるのは、読む気になるということ」

(2) 「本格的な意味での読書の人とは、書物を読むことが、その人にとっては、最も深い人生の喜び」

(3) 「人生を生きることの持つ深い味わいが、書物を読むことによって、しみじみと味わえる。人生において、真に愉快だ、楽しい」「読書によって、人生の深い味わいを噛みしめる」

(4) 「惰性的な単調平板な生活態度を断ち切って、そこに深さと緊張と新鮮さを与えるものが、真の読書」「居ながらにして、古今東西のすぐれた人々の心懷を窺うのに、世にこれほどたやすく、又、便利な方法があるだろうか」

9. この後、森先生は、

- (1) 「読書は、心の食物、養分、生きる力の源泉である」「真の書物は、生命に、感動と活力を与える」
 - (2) このような「良書」に接するための条件、「良書の選択を誤らぬこと」「それには、よい指導者を得ること」
 - (3) 「購入の際は、一冊に限ること。帰宅までに、時間を遅らせてでも、20 ～ 30 ページは読み進めておくこと」「傍線の引き方として4種類ある」
- 「読書の日常の心掛けとしては、何よりテレビの制限（現代はスマホの制限）である」

<コメント>

開倫塾では、開倫塾「塾生目標（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）」の実現と同時に、すべての基礎である「読解力」の育成のために、

「辞書教育」

「新聞教育」

「読書教育」

「図書館教育」

を推進いたしております。

森先生の「読書と人生」は、「読書教育」の基本テキストとして、すべての先生方の必読書と考えます。ぜひ、御一読ください。

2025 年 4 月 29 日（火）7 時 08 分